

Title	都市社会の安全
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	建築と社会. 1998, 79(5), p. 32-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2858
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

都市社会の安全

渥美公秀

安全を考えるなら、むしろ都市社会を離れた方がいいのかもしれない。事故の危険に満ち、様々な犯罪に出合う都市社会よりも、むしろ伝統社会の中に安全で生き生きとした安心できる生活を見いだすこともできる。では現代日本の都市社会は、危険過ぎて、もはや必要ないのだろうか。そんなことはない。都市社会は魅力に満ちている。人々が効率的に生産・サービスに従事しながら、楽しみや潤いを感じて生活を送っている。

本稿では、都市社会の魅力を再確認し、魅力の背後に潜む危険を点検する。その上で、潜在的な危険を軽減する可能性について論じてみたい。

都市社会の魅力

都市社会の魅力の一つに、選択肢の多様性がある。都市には、物人、機会、情報といったあらゆる方面で多種多様な選択肢が存在する。都会には、同じ機能であっても実に多様なデザインの物が溢れているし、人々の意見は多様で、様々な活動が許容される。同じ場所に移動するにもいくつかの交通手段があり、情報に至っては「洪水」という喩えさえ現実的である。

多種多様な選択肢が存在する都市社会では、多くの選択肢の中から自分の好みに合致する選択肢を能動的に選ぶという魅力が存在する。もちろん、能動性に対する懐疑を指摘することはできる。つまり、選択肢はそもそも外から与えられているし、能動的に選択したと思っても、実は広告などの情報によって操られた結果に過ぎないという指摘である。しかし、選択という行為そのものには能動性を認めることができるという点で、能動性の魅力は、都市社会に顕著に見られる魅力である。

一方、選択肢の多様性には、受動的な魅力も伴う。例えば自分にとって他人が多くの選択肢の一つになりうるのと同様に、他人にとって自分はやはり多くの選択肢の一つでありうる。その結果、都市社会では、誰のものでもない、しかし、誰のものでもあるような抽象的な視線が注がれる。そして「なにげなく見られている」という魅力が生まれる。都市社会には、多種多様な選択肢の中に漂う受動性の魅力が存在する。

都市社会の危険

ところが、選択という事態には原理的な危険—「選択肢に内在する危険」、「原選択肢に伴う危険」—が伴っている。さらに、選択肢が多様化することによって、都市社会に特徴的な「部外者不在の危険」、および「根源的孤独の危険」が生じる。

「選択肢に内在する危険」とは、選択の対象となる選択肢そのもの

のかかわる危険である。つまり、誤った選択をしてしまう危険である。例えば、モノレールを整備するか、地下鉄を整備するかという二つの選択肢を考えてみよう。モノレールを整備することに決めて建設を進めた結果、事故が多発したとしたら、モノレールという選択肢が含んでいた危険が顕在化したことになる。

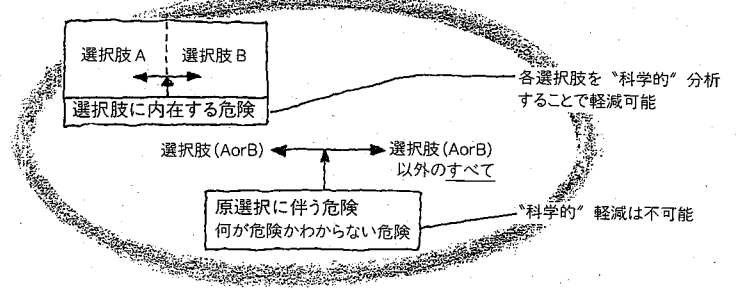
「原選択肢に伴う危険」とは、対象となる選択肢の背後で潜在的に行われている選択（原選択肢）に伴う危険である。例えば、モノレールか地下鉄かという選択には、背後に「（モノレールか地下鉄）、あるいはそれ以外のすべて」という選択肢が潜在的に含まれている。この「それ以外のすべて」を含む選択において、モノレールと地下鉄という選択肢群そのものを選択することを原選択肢という。「それ以外のすべて」には、選択されなかった事柄すべてが含まれ、全く予想もできないような、あるいは全く無縁だと考えられるような事柄が満ちている。

ところで、全く無縁で予想できない事柄の集合を〈外部〉という。〈外部〉は通常、暗黙かつ自明の前提とされており、顕在化することはないし、無視されている。したがって、〈外部〉に潜在する危険は、それに気づかないどころか、何が危険であるかさえわからないという危険が伴っている。そしてわれわれは思わぬところで思わぬ危険に出くわすことになる。「原選択肢に伴う危険」とは、〈外部〉に潜在する危険に気づくことのできない危険、すなわち「何が危険かわからない危険」である。

「選択肢に内在する危険」や「原選択肢に伴う危険」は、選択という事態に常に存在する原理的な危険である。したがって都市社会に限らず、いわゆる伝統社会であっても、これらの危険は常に存在する。しかし都市社会には、伝統社会とは違って多様な選択肢が存在する。都市社会の魅力の一つであった選択肢の多様性は、魅力であるのと裏腹に、都市社会に特徴的な危険—「部外者不在の危険」と「根源的孤独の危険」—を生じてしまう。

「部外者不在の危険」は、選択肢が多様化することによって誰もがあちらこちらで何が危険かわからない危険に直面し、もはや危険にとって部外者は存在しないという事態になるにもかかわらず、最終的には誰もが部外者として振る舞ってしまう逆説的な危険である。例えば、環境問題がそのいい例である。

一見、選択肢の多様性が増大すると、全く無縁で予想できない事柄の集合である〈外部〉は縮減するようになる。つまり選択肢が多くなると、〈外部〉が多様な選択肢にそれぞれ取り込まれ、その結果、〈外部〉は多様な選択肢によって埋め尽くされるようになる。そうすると多様な選択肢を通していろいろな場面で様々な事柄を検討したのだから、もう〈外部〉は存在しないように思われ、誰もが



何らかの形で部外者でなくなるかのように見える。しかしこれは、〈外部〉を有限集合だと考えることから生じる誤謬である。〈外部〉は無限集合であって、選択肢の数が増えても決して埋め尽くされることはない。むしろ選択肢の多様性が増大すると、“原選択に伴う危険”も多様化する。その結果、いたるところに「何が危険かわからない危険」が存在することになる。そして最終的には、危険はどこにもあるがどこにもないといった風感じられる。ここに、すべての人々が部外者でないと同時に、すべての人々が部外者だと認識する逆説的な危険が生じることになる。

次に、“根源的孤独の危険”は、都市社会における選択肢の多様性が個人の心理レベルに帰結する危険である。都市社会では、選択肢の多様性によって、誰のものでもない、しかし誰のものでもあるような抽象的な視線を味わう魅力があると述べた。しかし、具象的な身体（例えば、権威ある父親）を欠いた抽象的な視線のもとでは、自分自身が、誰でもあって誰でもないと感じて浮遊してしまい、孤独にさいなまれる危険が生じる。われわれは、相手を同定し、当該の相手ではない者として自己を確立するが、相手が誰でもないとか誰でもあるという状況では、自己の存在の根源が脅かされる危険が生じる。その結果、人は根源的な孤独に陥る危険に直面する。

都市社会の安全

都市社会の危険は、原理的な危険であったり、都市社会の魅力と裏腹の危険であるため、完全に回避することは不可能である。しかし、危険を軽減する実践的な手だてはありそうだ。

“選択肢に内在する危険”は、自然科学によって軽減できる可能性が高い。つまり、選択肢が同定できるのだから、その選択肢に含まれる要因を徹底的に分析することによって、「誤りのない」選択に近づける可能性がある。モノレールか地下鉄かという選択であるなら、分析すべき対象は同定可能であり、それぞれの長所短所について、いわゆる科学技術を総動員して点検精度を高めればよい。

ところが“原選択に伴う危険”は、自然科学では軽減できない。何が危険かわからない危険に対処するのであるから、対象を同定することから始まる科学の視点は、もはや有効ではない。“原選択に伴う危険”を軽減するためには、〈外部〉の点検を繰り返し、そこに潜在する危険を暴きつづける手段が求められる。

一方、都市社会に特徴的な“部外者不在の危険”は、もはや部外者がいないということを人々に認識してもらいしかなく、“根源的孤独の危険”については、孤独を和らげるための具象的な視線を持ち込むしかない。果たしてそのような手段は存在するのだろうか。

幸いなことに、現代日本の都市社会を見渡せば、これらの危険を

軽減する可能性が胎動していることがわかる。ボランティアの動向である。

まず、ボランティアは、〈外部〉の点検を繰り返すことによって、“原選択に伴う危険”を軽減する。ボランティアは、現行の組織や体制との距離を臨機応変に変化させながら、既存の選択肢群を懐疑の対象として、〈外部〉の点検を繰り返している。ボランティアが「思わぬ」視点を持ち込むことは、阪神大震災の例を引くまでもなく明らかである。もちろん、外部は厳密な意味で無限に広がっているのだから、ボランティアが点検を繰り返したところで、外部を点検し尽くすことは不可能である。しかし、多種多様な問題に取り組むボランティアが臨機応変に〈外部〉を暴き出すことによって、都市社会の危険を軽減することができるだろう。

次に、ボランティアは、もはや部外者がいないことを印象づける活動を通して“部外者不在の危険”を軽減する。例えば、いわゆる環境ボランティアの中には、ゴミ問題を通して、環境という部外者をもたない現象に対峙している団体がある。もはや部外者がいないことを知ることは、危険の回避そのものにはなり得ない。しかし、部外者がいないことを知ることによって、何が危険かわからない危険があまねく存在することへの耐性を養うことはできよう。

最後に、ボランティアは、具体的な人間関係の中で一人ひとりのかけがえのなさを確認することによって、人々を“根源的孤独の危険”から救い出す手段の一つでありうる。都市社会に生活して、孤独の間を垣間見してしまう不安のさなかに、顔の見える交流を楽しむ間柄が育まれたとき、鋭い情緒を伴った魅力が生まれることは誰しも体験していることだと思う。それは、抽象性の砂漠の中に具象性のオアシスを見つける喜びとても表現できよう。実際、ボランティア個人に活動への参加理由を尋ねれば、「人と触れ合いたいから」「人に誘われたから」といった理由が返ってくる場合がある。互いに顔の見える人間関係を営み、規制やマニュアルによって規制しにくい全人格的な交流が生じるボランティアの現場は、孤独をいやす身近なオアシスの一つになりつつある。

都市社会の安全を考える場合には、大衆化しつつあるボランティアの動向としっかり向き合う必要がある。ただ、都市社会におけるボランティアの大衆化はまだ始まったばかりである。今後は、都市社会の安全のためにも、いわゆる NPO 法案のような制度的支援と、ボランティア個人のかけがえのなさを踏まえた多種多様な活動への深い理解が求められる。

(あつみ とむひて 大阪大学人間科学部ボランティア人間科学講座助教授)
Ph. D.(psychology)